—学 会 録 事—

1. 1992・1993年度会長及び評議員選挙

8月10日に投票用紙と選挙人名簿を発送し，次期会長と評議員の選挙を実施した。9月1日に田中次郎・宮田昌彦両氏の立会いの下に開票が行われ，次の方々が選出された。

会　長　有賀祐勝

評議員　山本弘敏・川井浩史（北海道地区）
谷口和也（東北地区）
井上　勲・原　慶明・千原光雄（関東地区）
田中次郎・岡崎恵視（東京地区）
横浜康継・喜田和四郎（中部地区）
榎本幸人・鯵坂哲朗（近畿地区）
大野正夫・月舘潤一（中国・四国地区）
右田清治・奥田武男（九州地区）

2. 日本藻類学会秋季シンポジウムと懇親会

1992年9月16日，日本植物学会第57回大会前日に，日本藻類学会秋季シンポジウムが清水　晃（奈良女子大）・中原紘之（京都大）の両氏を世話人として，奈良市の帝塚山短期大学で開催された。テーマは藻類の遺伝学で，有賀祐勝会長の挨拶ならびに演者紹介のあと，榎本幸人氏（神戸大）を座長に，坪　由宏氏（神戸大名誉教授）による「微細藻類」と三浦昭雄氏（東京水産大名誉教授，青森大教授）による「大型藻類」の二つの講演が2時間にわたって行われた。坪氏はクラミドモナスのあの歴史的なMoewusの実験の話から，氏の研究室で行われているクロロプラストの遺伝に関する最近の話題などについて講演され，三浦氏は氏の研究室で解明されたアマノリ類の減数分裂の時期，それを解明するにいたった色素体変異株を用いた交雑実験，ならびに様々なキメラ体がどのようにして生じるかの詳細を講演された。非常に興味深い話であったが，植物形態学会と重なったためか，参加者が例年より少ないのが残念であった。

シンポジウム終了後，引き続いて同大学軽食堂ホールにおいて，鯵坂哲朗氏の司会で懇親会が開催された。会は会長の有賀祐勝氏の開会の辞に始まり，地元の瀬戸良三氏の乾杯の音頭で幕を開け，2時間近くにわたってなごやかに行われた。

シンポジウム参加者は次の通り（○印は懇親会出席者）。

○鯵坂哲朗，○有賀祐勝，○石川依久子，○出井雅彦，○榎本幸人，大森長朗，○小河久朗，○奥田一雄，○奥田武男，○加崎英男，○金網善恭，○神谷充伸，川口栄男，○河地正伸，○川端良子，○高原隆明，○清水　晃，○須田彰一朗，○瀬戸良三，○坪　由宏，○中川　功，○中原紘之，○永易あかね，○長島秀行，○長嶋美香子，○野崎久義，○林由佳，フィリピーナ・ボロイ・ソット，○福田育二郎，○堀口健雄，○本多大輔，本多正樹，松尾雅志，○松田吉弘，○真山茂樹，○三浦昭雄，○山岸高旺，山口忠則，○渡辺　信，○綿貫知彦（五十音順）

世話人の清水　晃・中原紘之両氏とシンポジウム運営にご配慮下さった方々にお礼申し上げます。

3. 臨時評議員会

1992年9月16日（水）13:30〜15:20，帝塚山短期大学で評議員会が開催された。出席者は有賀会長，石川，榎本，小河，中原，渡辺各評議員。

(1) 学会誌の改革について，ワーキンググループ（世話人：石川）の中間報告が石川，渡辺両評議員から説明され，質疑と検討を行なった。中間報告を欠席の評議員に送付して意見を聞くこととし，同報告を学会誌に掲載して全会員に周知させること，明年3月の大会の時にこの件に関する討論会を開催することについて欠席の評議員に賛否を問うこととした。

(2) 第18回大会（1994年3月）を富山で開催することについて異議はなかったが，欠席の評議員にも賛否を問うこととした。

—日本藻類学会誌改革ワーキンググループとその答申—

1991年に井上　勲・渡辺　信両評議員から提案のあった学会誌の改革については，すでに「藻類」第40巻第2号の学会録事の欄に記載されているとおり，石川依久子編集委員長を世話人とするワーキンググループ(WG)にその可能性や問題点の検討をお願いしてありましたが，後記のようにWGから中間答申がありました。この中間答申は，去る9月16日に帝塚山短期大学で開かれた評議員会で石川委員長から説明があり，論議されましたが，出席評議員が少なかったこともあり，欠席の評議員にコピーを配布して意見を求めると共に「藻類」にも掲載して広く会員に周知し，アンケートにより会員の意向を調査することになりました。創立40周年を迎えた本学会が益々発展するために，一人でも多くの会員がアンケートにお答えくださるよう希望します。　　（会長　有賀祐勝）

日本藻類学会誌改革ワーキンググループ中間報告

本ワーキンググループは1992年3月の日本藻類学会大会の総会決議を受けて次のような委員構成で発足し，以来3つの班で検討を続けるほか3回の全体会議を行いさらなる検討を重ねてきた。その結果について中間答申としてここに報告する。

ワーキンググループ委員の構成

委員長：石川依久子
幹　事：原　慶明，増田道夫，渡辺　信
出版社渉外班：野崎久義，井上　勲，川井浩史，田中次郎，真山茂樹
外国渉外班：川井浩史，鯵坂哲朗，堀口健雄
和文誌検討班：藤田大介，岡崎恵視，前川行幸，須田彰一朗

各班のこれまでの活動内容の概要

i）出版社渉外班
国際的出版社との契約で発行した場合の条件，経費などを見積もるため，対象となる出版社をリストアップするとともに，そのうち可能性があると考えられる3社（エルセビア，シュプリンガー，ブラックウェル）につき，現在の藻類学会および「藻類」の出版状況を前提に具体的な条件や経費の見積を依頼し，その結果につき具体的に検討した。

ii）和文誌検討班
和文部分への会員のニーズを明らかにするために，学会の会員名簿をもとに会員の分野別構成，和文論文投稿調査（「藻類」および関係学会誌など）をおこない，和文誌のニーズを分析するとともに，分離出版した場合の経費，運営形態などを具体的に検討した。また，和文誌と英文誌の分離の是非に関して予備的なアンケート調査を行った。

iii）外国渉外班
現在同様の課題を抱えているイギリス藻類学会誌の事例を調査するとともに，今後，外国の藻類研究者に編集や出版などにおける協力を要請した場合の実現の可能性などを探るために，オセアニア地区での藻類研究者の現状などについて個人レベルでの情報収集・交換をおこなった。

《中間答申》

本ワーキンググループはまず渡辺・井上両評議員の提案書の指摘にある「藻類」の現状に関する問題点を再検討し，つぎに改革の可能性について具体的な情報のもとに検討をおこない，以下の認識にいたった。

1）「藻類」の現状における問題点

＊学術雑誌としての評価を考える上で，掲載された論文の引用，別刷の請求などが一つの評価の基準となると考えられるが，現状ではそれらの数は非常に少なくなっている。その理由の一つとして外国会員が少なく，特に図書館などでの購読が少ないため，「藻類」に掲載された論文が，そもそも外国の研究者の目にとまる機会が少ないことがあげられる。

＊外国会員の数は現在100名程度であり，真の国際誌と呼ぶには全体の会員数（約750名）から考えてあまりに少なく，特に外国を含む購読は50件程度と非常に少ないうえ，現在はさらに減少傾向にある。外国の会員が少ない理由としては，円高のためもあって藻類学関係の他の学会の会費と比べて日本藻類学会の会費が高いこと，「藻類」では英文と和文が混在しているため雑誌としてのレベルも現状以下にみられ購読意欲をそそられないこと，大会参加などのメリットが無いことなどが考えられる。今日，J. Phycology や Phycologia などの雑誌は年6回の刊行となり，掲載される論文の

量も増えていることを踏まえると，今後「藻類」とこれらの国際誌との格差がますます開いていくものと予想される。

＊現状では投稿論文数が少ないため，学会誌としてのレベルの維持が困難な状況にあり，また経済的理由などから英語のチェックを充分におこなって英語論文を完璧なものにすることにも困難がある。

＊現在は英語論文の審査はほとんど国内で行っているため，必ずしもその投稿論文の内容に関する適当な専門家のところへ審査を依頼できるわけではない。そのため審査の内容が充分でない場合もあり，この点に関する不満もある。

＊「藻類」における和文論文の比率が減少してきた。その理由の一つとしては英文・和文が混在していることにより，和文論文は英文論文に劣るという印象を与えていることが考えられる。

＊地球環境問題やマリンバイオテクノロジー等がクローズアップされている現在，生物群としての藻類は今後有望な生物資源として，また生物の多様性といった観点からも，以前より大きな注目を集めている。これにともない藻類学の領域や研究者の幅は国内でも拡大しているはずであるが，「藻類」はそのような国内需要に充分対応できていないと考えられる。

以上のことをまとめると，1)外国の会員および購読が少なく，海外への普及が悪いため論文の投稿数が少なく掲載論文の質が向上しない。そしてその結果として，外国会員・購読が伸びない，2)さらに和文論文数が急激に減少し，それにともない，会員間の情報交換や啓蒙誌としての機能が果たせなくなり，国内の会員や購読も伸びない，という2重の悪循環に陥っていると考えられる。このような問題を解決するためには，①雑誌の質を高められるより良い編集体制の確立，②外国会員および購読(特に大学図書館などの公的機関)の拡大，③投稿論文の量と分野の拡大および質の向上，④和文論文や国内会員間の情報交換および啓蒙活動の一層の充実，を目指した抜本的な改革が必要であるとの認識で一致した。

2)「藻類」の改革案とその検討

近年の「藻類」では英語の論文数が圧倒的に和文の論文数を上廻っている。論文を英語で投稿するということは，その研究を広く世界に知らせたいためである。したがって多くの会員は「藻類」が真の国際誌として発展することを望んでいるはずである。しかし，一方では，藻類学会の会員の多くは和文の論文，総説，記事などの掲載を期待しており，このことは会員間の情報交換や藻類学における啓蒙活動という見地からも非常に重要である。しかしながら現在のような和英混在の現在のフォーマットでは国際誌としての高い評価を得ることが困難であると同時に和文の充実にもマイナスである。従って，「藻類」の改革のためには英文誌と和文誌に分離することが不可欠であるとの結論に達した。そこでこの前提の上に立ち，英文誌と和文誌をともに充実させるための具体的な方法につき検討し，以下の結論を得た。

i）英文誌

英文誌は編集の国際化，外国会員・購読の拡大を目指し，特に太平洋西部地区の藻類学研究者との連携の強化をはかる。このためには，外国人会員の編集への参加，およびこれらの地域の藻類学会などの理解と協力が必要であると考えられる。さらに将来的には，太平洋西部地区での藻類学会連合の設置と，この学会連合による共同編集・出版も検討すべきである。

以下のような理由から英文誌は国際的な出版社との契約により出版することが望ましい。

＊大学図書館などの購読の拡大を考えると，実績のある出版社からの出版は非常に効果的である。このことについては出版社のネームバリューに加えて，出版社自身のプロモーションも期待できる。

＊英語の校閲や英文の初期校正など日本人のスタッフだけでは困難な作業，また国際感覚にもとづいた印刷スタイルの編集などは，国際的な出版社の編集スタッフが加わることで，より適切におこなうことができるようになる。このことは雑誌の対外的な評価を高める上で大きな効果がある。

＊雑誌の体裁，契約内容にもよるが，出版社からの出版の方が学会からの出版より少ない経費ですむ可能性がある。この場合，雑誌の体裁を現状のB5版からA4版に拡大し，名称をより一般的なもの（地域名を含まないもの）に変更する。年4回各号60～70頁とし，用紙・印刷の質などは少なくとも現状を維持することを前提とする。

ii）和文誌

和文誌は会員間の情報交換，啓蒙誌としての機能を充実させるため，和文論文（英文要約をつける）のほか，速報，総説，口絵写真，解説（検索表），採集地案内，採集記録，研究機関案内，関係論文リスト，学会記事，訃報，会員短信などを掲載し，かつ時代のニーズに応えるための記事も多く盛り込む。

編集体制は英文編集との重複を避け，現状程度の規模で行うが，印刷の形態については経費削減のため，DTP（デスクトップパブリッシング）の導入も含め検討する。具体的には編集段階で，完全原稿とするか，またはその前の段階まで作成し，印刷における経費を縮小する。

雑誌の名称は「藻類」を継承し，体裁は現状のままB5版，年2回各号100頁，可能ならば年4回各号50頁発行とする。

iii）その他

出版助成金に関しては，文部省に打診の結果，一学会で一機関誌のみ対象となるが，名称の変更は可能であるとのことなので，英文誌を対象に継続して申請する。他の学会組織との共同出版となった場合には，再申請ということになるかも知れないので，発行形態についてはさらに検討を要するが，出版社からの発行自体には問題はない。

英文誌，和文誌の分離にともなう経費の増大に対処するため，事務業務委託内容の見直し，賛助会員会費の見直し，オークション・講習会などの学会事業の展開を検討する。学会事業の展開は財政的なゆとりの有無だけでなく，学会活動の活性化にもつながるので積極的に進めるべきである。また，現在の事務業務委託費は，その内容から考えて経費が大きすぎる。パソコンによる会員管理が容易になった今日，経費節減のための見直しが必要であると考える。

英文誌と和文誌の分離にともない，外国人会員には英文誌のみ受け取る外国会員の制度を新たに設け，会費を一般会員より安くする。

出版経費に関する調査

英文誌年4回（A4，260ページ），和文誌年2回（従来のスタイル）あるいは年4回（完全版下受取）の刊行は，現在の会費のままで可能であり，そのためのいく通りかの方法について現在詳細に検討中である。

―会員移動―

新　入　会

住 所 変 更

退　　会

岡村　秀雄（茨城県）

Acknowledgements to reviewers for Vol. 40

The Editorial Board is grateful to the following persons for their cooperation in reviewing the manuscripts submitted to the Japanese Journal of Phycology Volume 40. Special thanks are due to Dr. Annette W. Coleman, Brown University, USA for her help in reviewing and correcting English in the abstracts.

Yusho Aruga
Mitsuo Chihara
Annette W. Coleman
Yoshiaki Hara
Terumitsu Hori
Takeo Horiguchi
Terunobu Ichimura
Isao Inouye
Tetzuya Kato
Hiroshi Kawai
Miyuki Maegawa
Michio Masuda
Taku Misonou
Taizo Motomura
Hiroyuki Nakahara
Hisayoshi Nozaki
Masayuki Ohmori
Masao Ohno
Megumi Okazaki
Naotsune Saga
Shinichiro Suda
Jiro Tanaka
Noriko Takamura
Masakazu Tatewaki
Masashi Tazawa
Makoto M. Watanabe
Takaaki Yamagishi
Yasutsugu Yokohama
Tadao Yoshida